

彼女は不思議な人だった。

桜ではなく、梅が似合うそんな少女だった。

「クラスメイトくん、大好きだよ」

子犬のような笑顔で俺に微笑み、愛を囁く。

「きみが好きだよ、クラスメイトくんが好きだよ、だからずっと一緒にいてね、私はクラスメイトくんしか見てないし見る気がないから、大好きだよ」
自分を低く見積もる癖がある、誰よりも天才で欠陥を持って生まれた少女。人の名前を覚えられない、そんな少女。

「暖かい家庭で育った君にこんな醜いあたしはふさわしくない。だから好きって言っちゃだめだよ……」

そういわれた時、俺は自分が彼女の事情を甘く考えていた事実に直面し

た。それでも、それでも彼女が好きだった。

彼女がそう思っている、そういう考えを持っているところ含めて愛しているから好意を伝えた。

いつか、全員に与えられるべき彼女が弱みに付け込んだだけだと俺を憎んでもいい、俺以外の人間を好きになってもいい、でも今の彼女を救えるのは俺だけだから、だから救いの手を伸ばした。

今の俺を信じてほしいから、裏切ったら刺してもいい、そんな約束をして。

幸い、彼女は何年たっても俺のそばを離れることはなかった。

オレも彼女をずっと愛し続けたし、彼女も俺をずっと好きでいてくれた。

学部は違うが同じ大学に進学し、就職した後結婚し、俺達の間の子供が生まれた。

「ねえ、あたしね、貴方に出会えて本当に良かったって思ってるよ、だからありがとう、私に幸せをくれて、家族になってくれて、大好きだよ」

ずっと心残りだった、彼女を救えたのかどうか。

ずっとこの関係が共存ではないのかと思っていた。

俺は彼女を救えたのだ、あの時の俺の選択は間違いはなかった。

誰にでも享受されるべき幸せを与えることができた、そして彼女からありがとうという言葉をもらえた。生きていてよかった、彼女と仲良くなるきっかけがあつてよかった。

——俺は運命に感謝した。

